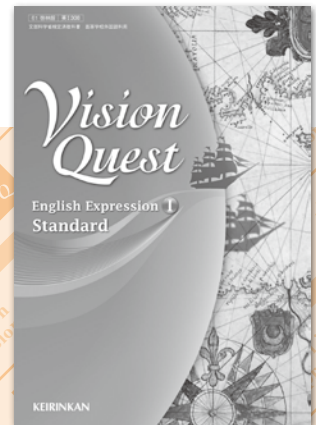


Vision Quest English Expression I

[英語表現 I 授業実践記録] Part 2



Vision Quest English Expression I Standard を使ってみて

— Model Conversation の可能性

熊本県立人吉高等学校 渡邊 利夫

p.2-5

「英文の仕組みがわかる」授業

貞静学園中学高等学校 鹿川 雅美

p.6-7

特別支援教育の発想に基づいた授業展開

— Grammar, Exercisesを中心に —

兵庫県立姫路別所高等学校 田岡 靖子

p.8-10

教科書を5周して知識の定着と 運用能力を高める

秋田県立横手清陵学院高等学校 藤田 義人

p.11-13

例文をしっかりと 頭にしみ込ませるには…

東京都立青山高等学校 眞島 幹子

p.14-16

Vision Quest English Expression I Standard を使ってみて

－ Model Conversation の可能性

熊本県立 人吉高等学校
渡邊 利夫

使用教科書	Vision Quest English Expression I Standard
単位数	2単位
使用副教材	音声 CD
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

本稿では、『Vision Quest English Expression I Standard』（以下『Vision Quest』と省略）の効果的な使用法について考察したい。

本論に入る前に、まずは簡単にはあるが、熊本県における本校の立ち位置と生徒の現状についてお話しする。これによって、なぜ本校が数ある「英語表現」の教科書のなかから『Vision Quest』を採択したのかを理解していただければと思う。

2. 本校の現状について

熊本県立人吉高等学校は熊本県の南東部に位置しており、宮崎県との県境にある地域の進学拠点校である。今年で創立 90 周年を迎え、1 学年は約 280 名であり、進学先は京都大学、東北大学、九州大学、熊本大学医学部に現役合格する者から、専門学校や公務員になる者まで様々である。いずれの県の郡部の学校が抱えたとおり、本校でも極端な「学力の 2 極化」に頭を痛めている。英語科としては、入学してくる生徒の英作文力と読解力が年々雑になっていることを危惧している。たとえば、新入生検査やその後の課題考査の解答には次のような英文が非常に多く散見される。

Where is she live?
Who did buy the flower?
What do you belong to club?
She walking across the street.

これらの誤った英文を一笑に臥すことはできないと思う。これらは、本校に入学してくる生徒の理解度はもちろん、彼らが受けてきた語学教育の生々しい背景を語ってくれる。おそらく、中学校の外国語教

育は高校の現場以上に難しい立場に立たされているのではないだろうか。“楽しく学ぶ”というコミュニケーション的な形式を取りながらも、増加した学習内容と語彙を習得させなければならないという、学習内容（およびその進度）と学習形態とが背反する状況に苦しんでいるように思われる。そしてその結果、基礎的英作文力と読解力が曖昧模糊としたまま入学してくる生徒が増えてしまっているのではないだろうか。

さらに、英語の学習環境における地域間格差にも注目すべきであろう。熊本市内と郡部とでは学習塾の数が圧倒的に違う。学習塾では、高校入試に合格させるために、英文の基礎的な構造を何度も書かせるなどして定着させる。中学校が仮にコミュニケーション的な授業を行ったとしても、それを補完するものとして学習塾が――その賛否は別にして――機能しているように思われる。しかしながら、私たちの地元を含め、多くの郡部では進学塾の数はそれほど多くはない。つまり、内部においても外部においても、学習内容を徹底させる機会があまりないまま、「なんとなくの理解」と「自信のなさ」が同居した英文が左記のものであり、彼らが書く英文はそのまま彼らの「内面」を映し出しているように思われる。

3. 『Vision Quest』を採択した理由

さて、こうした現状を踏まえると、私たちが「英語表現」で行うべき方向性はおおよそ次のようになる。

- (1) 中学校で学習した文法事項を確認し、第3文型 (S+V+O) を使った文章、疑問詞を使った疑問文を安定した形で書ける、あるいは言えるようにすること。
- (2) コミュニカティブな英語授業を通して、いわゆる理論(文法や文構造)と語感を同時に養うよう

にすること。

- (3) 生徒のモチベーションを維持しながら、3 年間という短い期間のなかで、(1)(2)の事柄の改善と向上を促していくこと。

非常に平たく言えば、自らを英語で表現するうえで土台となる、簡単な文構造を徹底させるということである。第 5 文型は難しくとも、短い文章でかまわないので、第 3 文型と簡単な疑問詞を使った疑問文をきちんと理解できているだけでも、自分の意見や考えを述べる際の表現のしやすさ—表現の自由度—は、随分と上がるのではないだろうか。むしろ、逆にそれらをあやふやにしたまま学年を経た場合、彼らが書く英文らしきもののひどさは学年進行と共に目も当てられないものになるだろう。では、これこそ非常に難しい問いなのだが、いかにして定着を促すのか？

筆者が、あれこれと「英語表現 I」の教科書を眺めていて、『Vision Quest』が良いと思った理由は、(1) 文法事項がある程度、絞り込まれていること。(2) Model Conversation が使い方次第で、基礎英文の定着に使えること。

の 2 点による。まず(1)についてであるが、『Vision Quest』は 12 あるレッスンに従って、文の種類から仮定法までの基本的文法事項がほぼ網羅されている。さらに、各レッスンで取り上げられる文法項目が絞り込んであるため、早い段階で基礎的文法項目を一巡することが可能である。たしかに、一部に『Vision Quest』は全ての文法項目が網羅されていないという声を聞くことがあるが、たとえばこの教科書を使って基本的な文法項目を早く終わらせ、2 巡目に副教材の文法書と併用することでさらに深い理解を促すという方法もあるのではないだろうか。文法の学習は、深いレベルで概念操作に関わるため、生徒の発達段階に応じて触れる学習内容にも変化が必要があると思う。実際、本校では、「中学校で習った英文の理解の裏をとる」ことを目標に、スピーディーに教科書を進め、11 月までに教科書を一巡する予定で進めた。

(2) の Model Conversation の使い方は (1) 以上に重要であると思う。『Vision Quest』には、各レッスンの冒頭にちょっとした対話が載せられている。

Model Conversation

【K: Kaito / E: Emily / P: Priscilla】

K1: Hi, Emily. What a nice surprise! I didn't expect to see you here.

E1: Oh, Kaito. Are you going to join the tennis team, too?

K2: Yes. I'm glad we are here together.

E2: Me, too. Oh, Kaito. Meet my new friend — Priscilla Smith. She's an exchange student from Canada.

K3: Pardon me? I didn't catch your first name.

P1: It's Priscilla.

K4: Sorry, Priscilla. I'm Tanaka Kaito. Nice to meet you.

P2: Nice to meet you, too.

K5: Let's have lunch together sometime.

E&P: Sure!

(Vision Quest English Expression I Standard p.7)

最初にこの対話を目にしたとき、これは使えるかもしれないと思った。対話文という形式のなかに、生徒が苦手とする「感嘆文」や「be going to 動詞の原形」などが頭に残りやすい形で載っていたからだ。これらをもとに次のようなワーク・シートを作成してみた。

【語感を大切にしながら読んでみよう！】

Model Conversation

【K: Kaito / E: Emily / P: Priscilla】

K1: Hi, Emily. () () () surprise! I didn't expect to see you here.

E1: Oh, Kaito. () you () () () the tennis team, too?

K2: Yes. I'm glad we are here together.

E2: Me, too. Oh, Kaito. Meet my new friend — Priscilla Smith. She's an exchange student from Canada.

K3: Pardon me? I didn't () your first name.

P1: It's Priscilla.

K4: Sorry, Priscilla. I'm Tanaka Kaito. Nice to meet you.

P2: Nice to meet you, too.

K5: () () have lunch together sometime.

E&P: Sure!

音声 CD を使って本文のスク립トを音読したのち、今度はブランクが入ったシートを使ってグループ・ワークを行ってみる。このレッスンの場合は Kaito

役、Emily 役、Priscilla 役、それからスクリプトを見て英語をチェックする者という 4 人 1 組である。それぞれがブランクのあるスクリプトを見て台詞を言う際、言葉に詰まったりしたときは、英文をチェックしている人がそれを教えてあげる。時間があれば、それぞれの役を入れ替えてもよいかもしれない。それが終わると、今度は以下のようなシートを使って英語の語順や言い回しをさらに確認してみる。

Kaito: Hi, Emily. わあ、びっくりした！
私は予期していなかった / ここであなたに会うことを //

Emily: Oh, Kaito. あなたは加わるつもりですか / そのテニスチームに /, too?

Kaito: ええ、私はうれしいです / 私たちがここで一緒になれて //

Emily: Me, too. Oh, Kaito.
Meet my new friend — Priscilla Smith.
彼女は交換留学生です / カナダからの //

Kaito: すみません？ 私はとらえなかった / あなたの最初の名前を //

Priscilla: It's Priscilla.

Kaito: Sorry, Priscilla. I'm Tanaka Kaito.
Nice to meet you.

Priscilla: Nice to meet you, too.

Kaito: 昼食を一緒に取りましょう / いつか //

E & P: Sure!

本文を全員で音読したのち、役を入れ替わりながらワーク・シートを 1 回ずつ読んだだけでも、生徒達は合計 5 回文章を読んだことになる。しかも、教員側があれこれと英語もしくは日本語を話すこともなく、全て生徒どうしがコミュニケーションに練習を繰り返してくれる。1 レッスンだけでは大した効果はないかもしれないが、それが 12 レッスン積み重なれば効果が出てくるだろう。しかも、訂正や手助けを教員がするのではなく、生徒どうしが行うので、活動も非常にアクティブになることも予想される。レッスンが進んでいき、生徒がやり方に慣れてきたならば、対話の一部を “Are you going to join () ?” のように加工し、そこに自由に情報を入れさせる活動も可能になるだろう。以上が『Vision Quest』を採用した理由である。

4. 『Vision Quest』を使ってみての効果について

1 学期が終了した時点で、1 学年で一番早いクラスでは Lesson 6 の「受動態」、ほかのクラスは Lesson 5 の「助動詞」である。ワーク・シートも随時改良を加え、最終的には図 1（右記）のようなワーク・シートになった。

初期のワーク・シートとの違いは、Model Conversation の下に本レッスンで学んでほしいポイントをまとめている点と、テキストにある表現に関する問題を最後に貼り付けた点である。形式に慣れてきたのもあると思うが、1 レッスンを早ければ 1 時間で、遅くとも 2 時間で終わることができるようになった。

生徒たちにもいくつかの点で良い効果が出始めているように思われる。たとえば、本校で課題となっている「学力の 2 極化」についてである。Model Conversation は対話文で、内容もそれほど複雑ではないので、上位の生徒も下位の生徒も皆一緒になって声を出してアクティブに練習する。ペアワークで教え合ったりするので、いわゆる時間的な“間延び”も少ない。また、英文を声に出す機会が増えたために、英語を口に出すことへの抵抗が少なくなったようにも思われる。こちら側が “Speak in English.” という指示を出しても、すんなりと答えが返ってくるようになった。

リスニングにおいても、その効果が出始めているように思われる。定期考査でリスニング問題（実力問題）を出した際にも、こちらが予測していた得点よりも高い得点率を示していた。今後は、こうした活動が、生徒たちの「語感」を自然と高め、“I am surprising.” や “I walking on the street.” といった間違いが、英文法としての理屈の面だけでなく、発言したときの「音」の感覚として「何だかおかしい」と、その違和感に気づくようになればよいと思う。

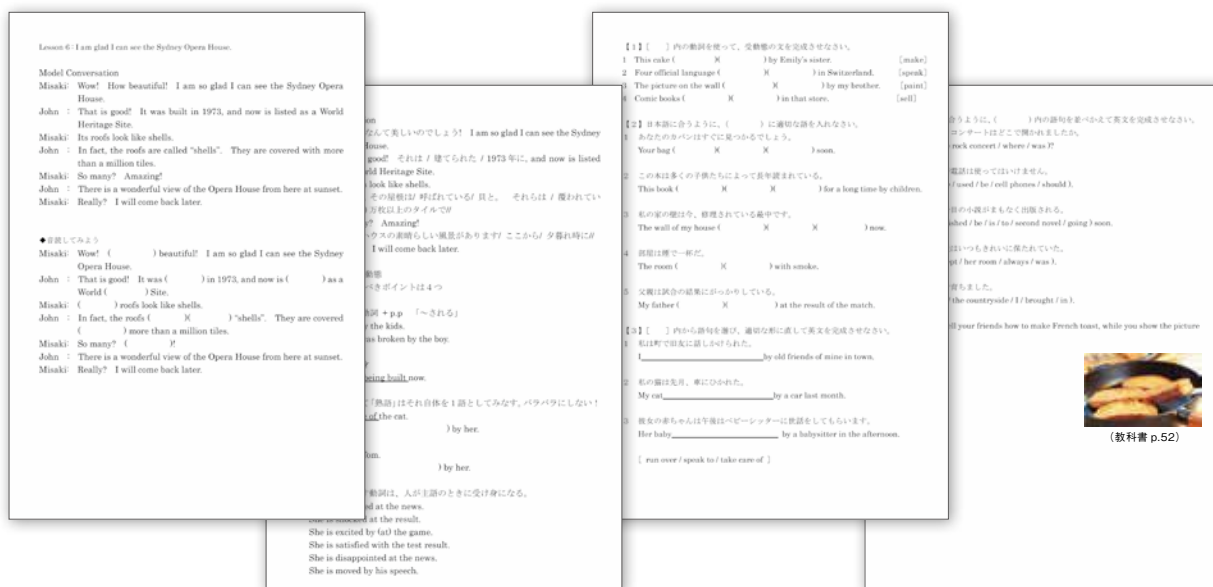


図 1. Lesson 6 のワーク・シート

5. 結び

本稿では、『Vision Quest』における Model Conversation の可能性について考察した。いくつかの高校では、文法の解説のために Model Conversation の部分を飛ばして、文法の部分だけを解説及び演習をしていると聞いたことがある。たしかに、3 年間という短い時間の中で大学受験を念頭にいた場合、文法と構文とを早い段階で仕上げてしまうことは大変重要であり、私も基本的にその考えに賛成である。

けれども、1, 2 年次の模擬試験に出るからという理由だけで、不徹底のまま終わっている中学英語が

ら目を反らし、生徒の現状に合わないレベルの英文を素材として使うのはいかなるものかと考える。「急がば回れ」は外国語学習の肝であり、効率ばかりを追い求め、定着のない学習になってしまえば本末転倒になってしまう。

「理論」としての支柱を教えると同時に、Model Conversation を用いて英語の「語感」としての経験値を上げておくと、教育効果はさらに上がるように思われる。本稿での考察がその一助になればよいと考える。

渡邊 利夫

わたなべ としお

1970 年生まれ。西南学院大学文学研究科卒。教職員歴 14 年目。現在、人吉高校にて勤務。

「英文の仕組みがわかる」授業

貞静学園中学高等学校

鹿川 雅美

使用教科書	Vision Quest English Expression I Advanced
単位数	2単位
使用副教材	Vision Quest English Grammar 47, 音声 CD
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

新課程となり、本校ではコミュニケーション英語Ⅰを週4時間、英語表現Ⅰを週2時間実施している。コミュニケーション英語Ⅰは3時間を長文読解、1時間をネイティブ教員による英会話の時間として確保しており、また、TOEIC Bridgeを活用したリスニングやディクテーション中心の授業も設け、授業ごとに特色を持たせながら指導を行っている。

現在指導している生徒は、英語、およびコミュニケーションに積極的な一方で、中学既習事項の知識が十分とはいえない。そのため、正しく英文を構成する力や、大学入試レベルの文法問題を解く力が不足している。

したがって、英語表現Ⅰでは基本的文法事項の定着を第一の目標とし、「ルールに則れば英語で文章を作ることができる」と実感させることからスタートしたいと考えている。

2. 具体的指導について

(1) 使用教材

教科書：『Vision Quest English Expression I Advanced』
 文法テキスト：『Vision Quest English Grammar 47』

(2) 指導の流れ

① 文法解説

教科書は Grammar の部分を特に重視し、例文を用いて文法解説を行う。この際、必ず音読に時間をとり、発音やイントネーションについても注意を促す。

Grammar のページは従来の文法書付属テキストと同様に使うことができるため、重要な点は教科書にチェックを入れさせながらテンポ良く解説を行う。

② 問題演習

教科書の Exercises を取り扱う。「教科書の問題は必ずノートに解く」というルールを決めており、答えを確認するだけでなく英文そのものの形を意識してほしいと考えている。

教科書の問題と並行して文法テキストの問題演習も行っている。文法項目によって教科書よりも取り組みやすい場合、文法テキストの問題を先に解くこともある。

③ 教科書の Model Conversation

文法解説を行ったあと、Model Conversation の音読並びに部分和訳を行う。テーマとなる文法事項が会話のどの部分で使われているのかを意識させるというねらいがある。

巻末に全文訳が掲載されているため、生徒は必要があればその場で内容を確認しながら進めることができる。文法解説後に行うことで「英文の意味が分かる」という感覚を少しでも持って欲しいと考えている。

④ 朝学習

本校では英語の朝学習を週に1度行っている。その際、Teacher's Manual 付属の「小テスト集」に手を加える形で活用している。教科書や文法テキストとは異なる英文に触れることで、演習量を確保している。また、内容は定期試験にも出題されるため、しっかりと取り組んだ生徒は試験でも結果が出ている。

(3) 1学期の指導を通して

① 動詞

生徒の様子を見ていると、動詞の使い方ですまずまずいことが分かる。「一般動詞の文なのに、

つい be 動詞を一緒に使ってしまう」「疑問文に対する動詞の答え方が分からなくなってしまう」「疑問文を使ったとき、動詞がどこに入るか分からなくなってしまう」などである。

特に Lesson 1 のなかで、中学校で触れた様々な形式の英文を復習することができた。難易度が適切な問題に数多く取り組むことで、少しずつ生徒自身で動詞の扱いに慣れてきている様子が見られた。

また、不規則動詞の変化形を定期テストの範囲とした。全問正解の生徒から、ほとんど覚えられなかった生徒まで様々であった。英文を書く基本となる「動詞を適切に変化させる力」を養うため、今後も繰り返し出題していきたいと考えている。

② 品詞、文型

コミュニケーション英語 I とも連動させ、強く意識させたい項目である。まずは主語 (S) と動詞 (V) を自分で見つけ出せるようになることが第一である。生徒の多くは無意識に S・V を判断しているが、常に「S は? V は?」と問いかけることで「英文を見たら分析を始める」という習慣を定着させたいと考えている。

Lesson 2 のなかで、S・V・O・C・M について定義をし、例文解説でも問題演習でも必ず文の要素を問いながら進めた。その結果、生徒たちは次第に分析することに慣れてきている。以降の項目においても継続し、「自力で英文を分析し、理解できた」という実感を持たせていきたいと考えている。

③ 英作文の指導

まず和文中の S・V・O・C・M を生徒に問いかけながらチェックしていく。

ヒント例) 私は 明日の今頃は 図書館で
 S M (時) M (場所)
 勉強しているだろう。
 V (未来進行形)

→ S・V・M (場所)・M (時) の順を確認し、英作文を進める。

どの日本語に対してどのような表現を使っていくのか、必要に応じてヒントを板書する。そのようにすることで「どこから手を付けたらよいか分からない」

と諦める者が減り、ある程度正しい英文を書ける生徒が増えてきた。

今後は同じ形式の英文を繰り返し、ノーヒントでも書けるようになるまで取り組ませる予定である。

3. まとめと今後の展望

高校 1 年生の時期に、英語表現 I という授業を英文法の土台を作る時間として活用できることは大変有意義であると感じている。1 学期の間は、教科書や文法テキストの最も基本的な部分のみを主に取り上げてきたが、今後は実際の場面での使用に通じる教材を適宜選定し、さらに表現の幅を広げることを意識していきたい。

また、文法テキストは 2 年次まで引き続き使用し、文法事項を網羅したうえで入試問題の演習に繋げていく予定である。教科書と文法テキストを併用することで、まずはポイントを絞って中学範囲に近いものを、その後細かい点を補足して網羅性を高めることが同じ教材を通じて可能になる。

今回、この授業実践記録を通して自分の授業を振り返り、「なんとも基本的なことの積み重ねで、地味な作業をしてきたものだ」と感じた。準動詞・関係詞など、「英語が苦手」という生徒にとっては大きな山場を迎えても、「ルールをつかむ感覚」と「英文を書けた喜び」を生徒に感じ取ってもらえるような授業づくりをしていきたい。

鹿川 雅美

しかがわ まさみ

岩手県出身。早稲田大学第一文学部英文学専修を卒業後、貞静学園中学高等学校にて英語科教諭として勤務。中 1 から高 3 までの担当経験を通じ、中学時点でのつまずきが大学入試まで尾を引きかねないということを痛感している。今年の目標は東京マラソン完走だが、まずは当選を祈る日々。



特別支援教育の発想に基づいた授業展開

— Grammar, Exercises を中心に —

兵庫県立 姫路別所高等学校

田岡 靖子

使用教科書	Vision Quest English Expression I Standard
単位数	2単位
使用副教材	ワークブック, Vision Quest 総合英語
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

実践記録に載せていただけるような、先駆的でも、技巧が随所に散りばめられた深みのあるものでもない、ただただ従来の取り組み程度のことしかできていないことを報告するのはおこがましいのだが、それでも何か参考になることがあればという一念で報告したい。

2. 授業・学校について

(1) 学校について

私が本校に着任した平成 22 年という年は、その後の授業展開に与えた影響が大きなものであったため、少し触れたい。本校は、平成 20 年度に文部科学省より「高等学校における発達障害支援モデル事業」の指定を受け、ユニバーサルデザインの教育をめざし、2 年間研究を行っていた。平成 22 年という年はその研究を経て、指導法や生徒理解の方法に指針がまとめられた年だった。最終報告書から「発達障害を持つ生徒及びその生徒を含む集団」を対象とした、授業やテスト、評価など多岐にわたる配慮事項を学び、授業に取り入れた。たとえば、授業における工夫では、次のようなものが挙げられている。

項目	配慮(工夫)事項
指示・説明	・黒板に本時の内容を毎時同じ場所に明示する。 ・声で指示すると同時にその内容を板書し、さらに机間巡視等を通じて個別に指示する。 ・黒板の指示(ノートに写す、参照ページなど)は、決まった色のチョークで書く。また、ノートのどこに書くかも指示する。
プリント	・作成の際に見やすさ・書きやすさを配慮する。 ・プリントの文字はゴシック体 12 ポイントを基本とする。 ・上下左右の端をあらかじめ切断しておき、ノートに貼りやすいようにする。
小テスト	・授業プリントを見ればできる、復習問題をこまめに実施する。 ・範囲を狭くする、授業中に練習の時間を取り入れる、同じ範囲を繰り返して行う。
組み立て	・講義形式よりも、参加型の生徒が考えて答えを出せるような授業形式にする。 ・作業を取り入れ、集中力向上と勉強方法の提案を図る。
やる気づくり	・小さな活動に対しても達成感が得られるようにスタンプを与える。 ・板書、練習問題を考查問題に直結できるようにする。

(平成 20 年度・21 年度 文部科学省「高等学校における発達障害支援モデル事業」最終報告書より一部抜粋)

(2) 授業に際して

本校では、英語表現 I を週 2 時間で行う。新カリキュラムでの新しい科目に、どのように授業を展開していけばよいのかイメージができず、また、表現という活動は本校生徒のレベルから考えるとかなり高度なものであると考えられたため、文法の力を積み上げたうえで表現活動に入ることができる「Vision Quest English Expression I Standard」を採用した。

本校生は、英語に対して苦手意識を強く持つ生徒が非常に多い。今年度の 1 年生に関しては、よりその傾向が見られる。中学校で学んだ内容の定着度が低いいため、週初めの授業の中で学び直しの活動も取り入れている。

3. 取り組み (Grammar, Exercises を中心に)

(1) Grammar

授業では、Grammar と Exercises がほとんど占めている。1 レッスンあたり、2 時間程度の進捗を進めている。1 時間目は Grammar の説明を行う。説明時には、「わかりやすく、具体的な指示・説明」を徹底するようにした。たとえば、教科書の例文はポイントを青字や下線部で分かりやすく示されているので、そこに着目させながら説明している。また、青色の網掛け部分にも重要項目が書かれているので、「青色の四角い部分」というように、「わかりやすい、具体的な指示」をするのに助かっている。レッスンによっては、Grammar のところをノートに写させることもある。その後 Exercises を宿題として、2 時間目に移る。考査前の復習に使うため、ノートに問題を解くよう指示しているが、教科書に書き込む生徒も多い。

(2) Exercise

誰もがすぐに気づくことを、何年もかけてようやく気付いたのだが、英語が苦手だと感じている生徒、英語を不得意とする生徒は、問題を解く際にポイントを見つけれられない、何を手がかりにして解けばよいのかわからず困っているのである。文法事項の理解力や、イディオムや単語などの語彙力も影響を与えているが、彼らにしてみると、たとえ日本語が添えら

れていても、空欄に何を入れるべきかわからない、少しでも知らない単語があると、それに気を取られてしまい、結果、問題が解けない、やはり英語はわからないからと、取り組むことすら放棄してしまうのである。そこで、問題を解く時には、何を答えればよいのか読み取ること、どこに着目すればよいのかを考えながら解くよう指導すればよいのではないかと考えた。その際、Teacher's Book でポイントとなるところに緑の下線が引かれているところからヒントを得、問題を解くうえでのポイントや、手がかりとなるところに下線部を引かせた (写真 1, 2)。並びかえの問題などは、主語と動詞を押さえさせたりもした。また、大問ごとに参照すべき Grammar のアルファベットが明示されているので、どこを見ればよいか指示するのに役立った (教科書を見るように指示しても、どこを見てよいかわからない生徒が多いため)。

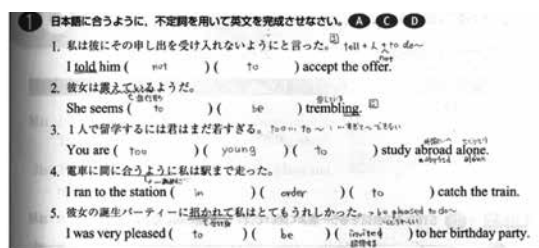


写真 1. 生徒が書き込んだ教科書の例 (Lesson 7 より)

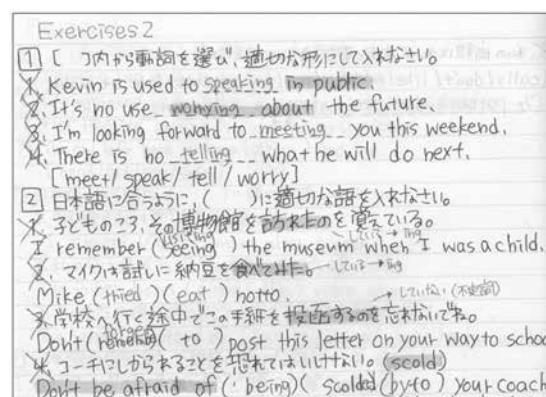


写真 2. 生徒のノートの例 (Lesson 8 より)

Exercises は、基本的に生徒を指名して解答させている。授業の進捗によっては、宿題ではなく、授業中に解かせている。その際、タイマーを利用して解かせているが、集中力維持・向上のためのファシリテーターとして、制限時間内に解答するスピードをつ

けるためのツールとしてタイマーは欠かせない（時間は一方的に決めるのではなく、生徒にある程度決めさせることで、生徒の自主性を促すようにしている）。

例のように、見るべきところや答えるポイントに線を引かせたり、言い換えさせたりしながら解かせるようにすると、中学校からつまずいている生徒でも、取り組めるようになり、解答を導き出せるようになった。問題が解けるようだと感じることで、授業により取り組むようになる。個人的には、この部分が重要であると考えている。

Exercises のあと、復習としてワークブックを週末課題として課している。時間がある時は、教科書と同じようにワークブックに下線を引かせたり、主語と（述語）動詞を押さえている。

4. 今後の課題

まず、授業が文法の解説と演習で占められてしまい、Model Conversation や Expressing の活動まで発展できていない現状がある。また、授業を始めて 10 か月経ってからようやく気づいたのだが、教科書とワークブックの練習だけで、文法に関する理解はまったく定着しておらず、定期考査後にはきれいに振り出しに戻っていた。週末課題として課しているワークブックもすこぶる提出率が悪いので、授業の中で活用することも検討している。

Grammar の説明には教科書だけでなく、CD-ROM の導入シートも併用していきたい。また、問題演習に関しては、CD-ROM や Teacher's Manual に収録されているワークシート集、小テスト & 評価問題集に豊富に問題があるので、それらを活用していきたい。文法事項の定着には、Expressing を使った表現活動が必至であると感じているので、いかに文法と表現活動のバランスをとっていかかが今後の課題である。また、2 学期末に授業アンケートをとったところ、1 レッスンを 2 時間で進むのは早いという声が多かったため、進度も合わせて検討していく必要がある。

5. 終わりに

前出の最終報告書で最も印象深かったのが、「学校にあふれている『困った』子が、実は『困っている』子であった」というフレーズである。生徒の「困り感」に寄り添った「集中でき、わかる」授業を追求することは、個に対する対症療法的に有効なものではなく、集団全体に対して大局的に見て普遍であると、本校で勤務をしていて確信している。

「授業がわかる」から「英語を使って表現」し、そこから言語に関する興味やコミュニケーションの力の養成につながるような、ユニバーサルな授業をこれからも目指していきたい。

田岡 靖子

たおか のぶこ

兵庫県明石市生まれ。京都外国語大学外国語学部英米語学科卒業。兵庫教育大学大学院学校教育研究科学校教育専攻教育基礎コース修了。現在、兵庫県立姫路別所高等学校勤務。最近の趣味は乗馬とベリーダンス。



教科書を 5 周して知識の定着と運用能力を高める

秋田県立 横手清陵学院高等学校

藤田 義人

使用教科書	Vision Quest English Expression I Standard
単位数	2 単位
使用副教材	Vision Quest 総合英語
使用デジタル教材・機器	なし

1. はじめに

教科書は 4 月から順番にレッスン 1 から始めて 1 年間かけて最後まで行く、という固定概念にとらわれず、生徒に到達させたい目標を設定し、その目標のために教科書を利用する、という発想でいきたいと考え、英語表現Ⅰにおいて実行に移した。その結果、教科書は 5 周することになった。学期ごとにどういった目標を立て、どう授業実践し、どう成績処理を行ったか紹介する。

2.1 学期（1～2 周目）

1 学期の生徒の目標は、(1) 現状の力を使い切つて、Expressing で求められていることを表現する、(2) 表現の幅を広げるために新たな文法事項を理解する、の 2 つである。

これらの目標を達成させるために、以下のように授業を組み立てた。

【1 周目】目標 (1) に向かう

1 時間目 = Lesson 1 Model Conversation
→ Expressing
(2～6 時間目同様の組み立てで L2 → L6)

【2 周目】目標 (2) に向かう

7 時間目 = Lesson 1 Exercises
→ Grammar
(8～12 時間目同様の組み立てで L2 → L6)

ここまでで 1 学期中間考査を迎えた。考査終了後は Lesson 7 から上記と同様の流れで組み立てて、1 学期期末考査を迎えた（考査の範囲は L7～L12）。1 周目は目標 (1)、2 周目は目標 (2) に専念することで生徒にも授業のねらいがわかりやすかったようである。

各活動について説明する。

① Model Conversation（予習あり。3 分）

ウォームアップの位置づけである。予習の段階で辞書を用いて発音を調べさせ、練習した状態で授業に臨む。授業では教師のモデルを聞いて調べてきた発音が適切だったかどうか確認し、必要に応じて修正する。

② Expressing（予習なし。45 分）

Step1 と 2 を各自あるいはペアで練習させ、Step3 の準備ができた生徒から教師の前で 1 人ずつ原稿なしで発表する。いわゆるスピーキングテストであり、紙で実施する定期考査と同格の扱いであると事前に伝えている。合格した生徒は教科書 2 周目に備え Exercises や Grammar の予習に取りかかる。早く終わったほうが予習できるメリットが得られるため、また時間内に合格しない場合、休み時間に取り組みなければならないデメリットが生じるため、生徒は必死に練習している（なお、実際は時間内にすべての生徒が合格するケースがほとんどである）。テスト終了後、個別にフィードバックを与えつつ、最後に全体で共有したい課題（たとえば特定の単語の発音やイントネーションなど）を指摘して授業を終える。

③ Exercises（予習あり。20 分前後）

Grammar あるいは『Vision Quest 総合英語』の説明を頼りに、自力で解答した状態で授業に臨む。授業においては、正解を得る前に、ペアやグループで各自の答えを比較させ、議論を通して活性化させた後で、生徒に答えさせるあるいは教師が解答を伝えるなどして正解を確認する。

④ Grammar（予習あり。30 分前後）

主に高校での新出事項を中心に説明し、中学校での既習事項と比較して理解を促す。ただし、1 周目

であることから、あまり周辺事項との違いを深追いせず、新出事項のおかげで新たにどういう表現が可能になるのか、という視点で指導する。最後に 1 学期の定期考査についてであるが、紙で実施する定期考査は同一問題とし Expressing と Exercises から出題する。最終的な成績は授業中に実施したスピーキングテストの成果と紙のテストを同等に扱い処理する。なお、この方針は 1 学期のはじめに生徒にアナウンスしている。

3. 2 学期 (3 ~ 4 周目)

2 学期の生徒の目標は、(1) 学習した文法事項を用いて Activity (教科書 p.96 以降) で求められていることを表現する、(2) 文法事項について周辺事項との違いを意識し理解を深める、の 2 つである。これらの目標を達成させるために、以下のように授業を組み立てた。

[3 周目] 目標 (1) に向かう

1 時間目 = Lesson 1 Pronunciation & Function
→ Activity
→ Grammar & Exercises
(2 ~ 6 時間目同様の組み立てで L2 → L6)

[4 周目] 目標 (2) に向かう

7 時間目 = Lesson 1 Original Exercises
→ Grammar Explanation
(8 ~ 12 時間目同様の組み立てで L2 → L6)

ここまでで 2 学期中間考査を迎えた。考査終了後は Lesson 7 から上記と同様の流れで組み立てて、2 学期期末考査を迎えた (考査の範囲は L7 ~ 12)。

各活動について説明する。

① Pronunciation & Function (予習あり。3 分)

ウォームアップの位置づけである。発音や機能について説明し、その後音読練習をする。

② Activity (予習なし。15 分)

1 学期の Expressing と同じ位置づけであるが、ここでは学習した文法事項を使って表現することを要求する。各レッスンと対応しているのでこちらから「第 1 から第 5 文型まで全部含めて」「関係副詞と関係代名詞をそれぞれ最低 1 回は使って」「仮定法

過去を用いて」などと指示し、意識すれば使える状態になるよう練習を促す。各自あるいはペアで取り組んでいる状態を机間指導しながら観察する。

③ Grammar & Exercises (予習あり。30 分)

家庭学習で該当レッスンの Grammar にある基本例文を暗唱練習して授業に臨む。また Exercises を口頭で答えられるよう音読練習して授業に臨む。家庭学習をしっかりと行うことで Activity がスムーズに実施される。また授業であらためて暗唱練習したり Exercises の音読練習をすることでターゲット項目への意識を高めさせ、家庭学習での各自の取り組みの重要性を認識させ、次の Lesson の Activity への取り組みがより良くなるよう好循環を作り出そうとしている。

④ Original Exercises (準備あり。15 分)

教科書の Exercises を参考に、生徒にオリジナルの問題を宿題として 1 問用意させ、授業が始まる前に板書させる。授業が始まると同時に生徒は白紙に黒板に書かれた数十問の問題の解答を始める。解答終了後は問題作成者が答えを口頭で発表し、自己採点する。なお事前に問題の範囲を生徒に個別に指示しておき、問題形式や出題項目に偏りが出ないよう配慮する。この活動は初見問題への対応力を身につける第 1 歩になると考えて実施している。

⑤ Grammar Explanation (予習あり。20 分)

1 学期には詳しく説明していない事項を中心に説明をする。2 学期は 2 年次のコース選択が始まり、進路を意識するところである。学習への姿勢も進路との関連で前向きになる時期であり、このステージで詳しい説明をしたほうが生徒にとってありがたい(?) のではないかと考えて丁寧に説明する。ただし、英語学習はさらに続くので、説明する項目は精選する。

最後に 2 学期の定期考査であるが、考査の前にスピーキングテストを実施し、授業では観察にとどまっていた Activity, Grammar (暗唱), Exercises (口頭運用能力) の到達度を個別に確認する。また紙の考査においては授業で扱った同一項目が定着しているか確認することに加え、関連した初見問題も出題することで item learning のみならず system

learning ができているか確認する。なお、この方針については 2 学期はじめに全体にアナウンスしている。生徒は教科書の読み込みに加え、各自で問題集を購入するなどして自主的な学習をすることになるが、こちらの意図は伝わっているようであり、たとえば英語検定の受検者は例年より圧倒的に多い。

4. 3 学期 (5 周目)

3 学期の生徒の目標は、(1) **学習した文法事項を用いて Use it で求められていることをまとめた分量で表現する**、である。教科書では 3 文程度、となっているが、このステージではそれにとらわれずに取り組ませる。

この目標を達成させるために、以下のように授業を組み立てた。

【5 周目】目標 (1) に向かう

1 時間目 = Lesson 1 Listening Task

→ Use it (Speaking)

→ Use it (Writing)

(2 時間目から L2 以降同様に組み立てて L12 まで 12 時間で終了。学年末考査を迎える)

各活動について説明する。

① Listening Task (予習なし。3 分)

ウォームアップの位置づけである。家庭で Model Conversation を読んだ状態で取り組む。

② Use it (Speaking) (予習なし。10 分)

まずは各自で準備し、ペアで紹介しあう。ここでは内容を重視し、続くライティング活動への助けとなるようにする。

③ Use it (Writing) (予習なし。35 分)

1 年生の終わりでは 100 語程度の分量が書けて欲しいと思っており、3～4 パラグラフくらいが目標となる。まずは分量を確保することが重要となるが、徐々に構成についても指導し、レッスンの後半には目標に到達するよう指導する。なお、授業においては (1) 教科書や辞書などあらゆる道具を利用し制限時間もあまり意識せず取り組むパターン、(2) 自力でかつ制限時間を意識して取り組むパターンの 2 種類を実施し、それぞれのコンディションで評価する。

最後に定期考査であるが、スピーキングテストに

おいては事前にアナウンスしてあるテーマでスピーチを課す。また紙の考査は 2 学期同様同一問題と初見問題の混合とするが、割合を変えて初見問題を増やす。これらのことは 3 学期のはじめに全体にアナウンスしている。組み立てからわかるように、授業において問題演習は行わないので、家庭学習による自発的な演習が必要となる。実際、生徒は程度に差はあるものの実行している。

5. おわりに

本校は生徒の能力差が比較的大きい学校であるため、クラス編成を工夫し、普通科 3 クラスを同時 4 展開で実施、具体的には応用 1 クラス、標準 1 クラス、基礎 2 クラスとして運営している。この形態に教科書 5 周アプローチを組み合わせることで生まれるメリットは次の 2 点である。

- ① 応用クラス・標準クラスにいる生徒は 2 周目あるいは 3 周目以降、理解に関わる時間を減らし、その分運用能力の向上に力を入れることができる。
- ② 基礎クラスにいる生徒は繰り返しターゲット項目に触れることでターゲット項目を理解することができる。

担当者は 4 人であるが、学期ごとの大枠の目標は全員で共有しつつ、目の前の生徒の実態に応じて各活動のどこに時間を多く配分するか調整して取り組んでいる。

目標を伝え、考査について伝え、授業がそして家庭学習がどう機能しているのか生徒と教師が共有することで成果があがってくると考えており実践している。

藤田 義人

ふじた よしひと

秋田県大仙市生まれ。秋田県立横手清陵学院高等学校教諭。教員歴 12 年目。大学・大学院における専攻は英語教育学。



例文をしっかり 頭にしみ込ませるためには…

東京都立 青山高等学校

眞島 幹子

使用教科書	Vision Quest English Expression I Advanced
単位数	2単位
使用副教材	Vision Quest 総合英語, ワークブック
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

英語表現授業の目標を1年次に文法定着、2年次と3年次に文法の復習とし、和文英訳や自由英作文など、自由に英語で表現できるようにと考えている。そのため2年次以降の英作文・自由英作文の完成を考慮に入れ、例文をいかに頭にしみ込ませ、表現に活かしていくかを1年次の課題とした。そこで例文定着の方法として、自分が実際に英語を勉強するなかで体験したことを授業で実践した例を報告したいと思う。

2. 実践例①：決められた時間内でどれだけ多くの例文を言えるか

『Vision Quest 総合英語』の基本例文集を用いて、毎授業、覚えてくる箇所を指定する。単元ごとや区切りのよいところなど、30～50文くらいが理想である。ペアになり、生徒Aが例文の日本語訳を言い、生徒Bはそれを英語で言う。生徒Aは、生徒Bのパフォーマンスをチェックする。生徒Bが途中で止まってしまった場合は、生徒Aがヒントを出す。多少のミス（冠詞を抜かす、時制）などは、流れを止めないように印をつけておいて、終わったあとにフィードバックする。1人の持ち時間は3分で、1人が終わったら交代する。覚えてきた例文の数によって、4分あるいは5分と設定を変えてもよい。なお、本校では3分の場合、30文を目標としている。すべて言えた場合、皆で拍手する。このアクティビティーは、授業の始めの7～8分程度で実施できるので、ウォーミングアップとして実用可能だ。授業内で英語を口にする機会にもなる。また、その日の学習内容と一致させるとより効果的である。

生徒どうしが組むので、どちらかがやってこない

迷惑をかけたり恥ずかしい思いをしたりするので、生徒たちもある程度真剣に取り組んでいる。ただし、やってこない生徒も見受けられるので、机間巡視で対応する必要はある。現在は、言えた例文の数を挙手によって申告させているが、記録させていくことも励みになるかもしれない。また、定期試験で例文を英作文として10点程度必ず出題するようにし、取り組まざるを得ない状況を作っている。

3. 実践例②：英文を使って会話してみると…

まず、先ほどと同じように、あるいは時間をとって例文を覚える。ペアを作り、A役、B役を決め、次の会話をさせる。例文集は見ないで会話するよう指導する。

Teacher: (to A) (例文) .

A: [Teacher's name] told me that (例文) .

B: Did [Teacher's name] tell you that (例文) ?

A: Yes, he/she did.

(AとBの空欄にはそれぞれ覚えたなかからの例文を入れる。)

実際の例文を入れると、次のようになる。ここでは、教師の名前をMikikoとしている。

【Example 1】

Mikiko: (to A) The road is covered with snow.

A: Mikiko told me that the road is/was covered with snow.

B: Did Mikiko tell you that the road is/was covered with snow?

A: Yes, she did.

次に、例文の人称を変えなければならないパターンを行う。

【Example 2】

Mikiko: (to A) I have just heard the news.

A: Mikiko told me that she has/had just heard the news.

B: Did Mikiko tell you that she has/had just heard the news?

A: Yes, she did.

時制については、時制の一致を意識して変えてもよいし、全員が同じ空間にいて伝えられており、内容も現在のことと捉えて、そのままでかまわないとしている。生徒たちは、インプットからアウトプットの両方の作業をここで行うことができる。聞いた内容を、そのまま再現するのではなく、その場の状況に合わせて、人称を変えたり、時制を変えたりしているので、すばやく言語処理を行う訓練にもなる。

<生徒 A の行為>

教師の言うことを聞き取ろうとする（インプット）

→相手にその内容を伝える、再現する（アウトプット）

<生徒 B の行為>

生徒 A の言うことを聞き取ろうとする（インプット）

→相手に確認するために、相手の言った内容を再現する（アウトプット）

例文の定着率もよい。まず、前もって自宅で目や耳を使ってインプットしたものを、授業では耳と口を使ってアウトプットできるので効果的と思われる。わかりづらい場合もあるので、その場合は、ペアを指名してデモンストレーションをやってもらうこともある。わかりづらいほうがチャレンジのしがいがあるのか、生徒たちは嬉々として取り組んでいる。

4. 実践例③：パターンプラクティスにトライ！

こちらは、基本例文集ではなく、Vision Quest のワークブックを使用する。このワークブックは英文の問題が非常に豊富で、最後の大問には英作文問題が 4 ～ 5 問収録されている。まず黒板に問題の解答を書かせ、チェックする。一通りの解説とノート

テイキングが終わると、1 ～ 2 分で黒板の英文を暗記するよう指示する。ストップウォッチが鳴る前に消去する。

ノートやテキストを閉じさせ、教師が日本語を言い、それを英語ですばやく答えさせる。最初は全く同じものを言うが、2 巡目あるいは単純な文などは一部を変えたり、副詞を付け加えたり、接続詞で文を長くしたりして、口頭で答えさせる。

【Example】

1. リサが写真を見せてくれたが、僕にはとてもつまらなかった。(Vision Quest Advanced ワークブック p.65)

Lisa showed me a picture, which was very boring.

2. リサは写真を見せてくれたが、僕にはとてもおもしろかった。

Lisa showed me a picture, which was very interesting.

3. リサは写真を彼に見せていたが、彼はとても興味を持ったようだった。

Lisa showed him a picture, which was interesting to him.

4. リサは写真を彼に見せたが、その写真は彼をとて怒らせた。

Lisa showed him a picture, which made him so angry.

5. リサは試験に受からなかった。そのことが彼をとて怒らせた。

Lisa didn't pass the exam, which made him so angry.

6. リサは試験に受からなかった。そのことが父親をひどく悲しめた。

Lisa didn't pass the exam, which made her father so sad.

というように文をどんどん変化させ、口頭でテンポよく答えていく。

5. 最後に

2 学期より、教科書の問題の解答をあらかじめ配布し、『Vision Quest 総合英語』を読みながら自宅で解答してくることにした。授業（50 分）は、前術した例文の練習などを冒頭に行い、教科書の問題を確認する小テスト、その解説、ワークブックの解答・解説という流れで行っている。

2 学期以降をそのように変更した理由は、1 つ目は、カリキュラム上、1 年間で文法事項を一通り終えるために、教科書とワークブックの plus ページを扱いたかったため、時間的な問題を考慮し変更したこと、2 つ目は生徒の学力を考えた時、教科書の問題は基礎的な力を養うのに最適であり、自学用で十分と判断したことだ。このためワークブックの問題を授業で十分に扱うことができた。教科書とワークブック以外にも副教材を用い、リスニング力の向上も図っている。

来年度以降も今年度同様、ワークブックを中心に授業を行い、そのほかにも副教材を用いて、引き続きリスニング力の向上を目指す。また同じく副教材を用いて文法問題の確認テスト（週 1 回程度）を実施する。そのほか、『Vision Quest Quick Review 16』を春休み課題とし、放課後講習や夏期講習時には英作文の問題にさらに取り組むことを計画している。

眞島 幹子

まじま みきこ

石川県出身。
津田塾大学学芸学部英文学科卒。
私立高等学校勤務を経て、現在東京都立青山高等学校勤務。
趣味は映画と買い物。

